

鷗外『舞姫』研究史考 (一)

檀原みすず

森鷗外の『舞姫』は、発表以来、九十年にわたる永い間、論議の対象としてとり上げられてきた。その間、『舞姫』をめぐる論議は諸説紛々として、今日もその後を絶えないかのような感がある。

本稿では、この作品が過去においてどのように読まれ論議されてきたか、その推移の跡を眺め、それをもって『舞姫』を考察する指針としたい。また、その研究史をみて行くことで近代文学研究の動向をもみることができないのではないかと思われる。

『舞姫』の研究史を展望するに当たっては、先学の師井キヌエ『舞姫』批評史略(「学苑」昭39・11、昭和女子大学)、山崎一穎「森鷗外研究史展望」(「評言と構想」パンフレット版1)版8、昭44・11)45・9、浅川書店、長谷川泉「森鷗外『舞姫』」(「解釈と鑑賞」昭44・7、至文堂)等の資料を道標とすることができるが、最近における著しい『舞姫』の実証的な研究は納められていない。特に近年における『舞姫』研究の成果は、安田保雄『舞姫』の比較文学

的一考察―鷗外とツルゲニエフ―や中井義幸『「エリス」という名について』など実証的な論考が輩出して、研究史上に変革をもたらすものと思われる。

研究史の区分としては、(一)明治・大正期 (二)戦前の昭和期 (三)戦後の昭和期に画定して、『舞姫』研究の進展をまとめてみることにしたい。

一、明治・大正期

『舞姫』が世に出るやいなや目敏く諸評が集められ、発表当時、鷗外の作品がいかに注目されていたかを物語っている。

『舞姫』発表の約一週間後には早くも、撫象子(巖本善治)が「女學雜誌」(明23・1・11)に「國民之友新年附録」の批評を掲げ、『舞姫』の主人公太田豊太郎の「意思の弱き」「操なき」性格と、立身出世のために懷妊の恋人をすてて帰東するという行為とを

非難した。しかし手法については、「末段エリスが狂氣せるの條は秀でたり」と誉めて鷗外の医学士ならではの描写力を認めている。

撫象子の『舞姫』評は、道徳的立場からの批判で、主人公太田の性格批評と作品に対する批評とを混同している。これを評論と呼ぶには脆弱のそしりをまぬがれないものであるが、倫理上の議論としては、今日でも『舞姫』感想の一方に存在している意見である。

思軒居士（森田思軒）は『報知新聞』（明治23・1・19）のコラムに「偶讀偶書」を載せ、「舞姫」は最初独逸文で案出されたものではないかという疑問を提出している。理由として、「舞姫」が、「其の篇法章法より以て字法に至るまで一に西洋文の神を摸し得ている点や、其の趣向は定めて君が留学中に看取し来りたる零碎の群材料を集めて成せるもの多し」点、さらに末尾のエリス喪心の一段は鷗外の独逸語を修めた医学上の描写に他ならないとする諸点を指摘して、要するに、思軒は『舞姫』の文体について独逸流であることを述べている。この文章を「温雅秀抜の精鍊文」と賞美したのは、『舞姫』の文体に関するいちはやい指摘であり、そこに鷗外の独逸文との接触があることをみたのである。

山口虎太郎と謫天情仙（野口寧齋）は共に「しからみ草紙」第四號（明治23・1・25）に一文を寄せている。

山口の「舞姫細評」は、西洋の文学理論に依拠し、方法論的に今日の比較文学を思わせるものがある。『舞姫』を「單稗」とし、心理觀察の方法によって理想の美趣を描き出していることに注目して、その構成が一つのテーマを中心にストーリーを描くハイゼ流で

あると指摘し、『ウエルテル』や『維廉マイステル』・戯曲「クラヴイゴ」などを『舞姫』の類似作品にあげている。そして「イヒロマン」の弊害と小説中の利点を論じて、卓抜な見解を呈している。

なお、『舞姫』の着眼点を、「主人公の性質」と「愛情の発達」とに置いたのは、後の『舞姫』論の萌芽を早くもここに見ることができる。以前において、女学記者（撫象子）が誉めた「エリスが狂スル處」を山口は「不可」として退け、独自の見識を示している。

「細評」と題されるだけに『舞姫』の結構や描写方法にも及んで、初期の『舞姫』評では、卓越したものである。

謫天情仙の「舞姫を讀みて」は、山口のような西洋文学に論をかきりた点はないが、彼のユニークな『舞姫』観を展開している。謫天は『舞姫』の出る以前から、鷗外の評論や翻訳に注目しており、この鷗外の処女小説ということで、かなりの関心を示している。この期待感はその時の読書界のあり方をうかがわせるものがある。謫天は『舞姫』について、次の四点を推讃している。(一)人物の性情がよく描かれている。(二)仕組が整然としている。(三)文体は和漢洋の折衷体でその文章は平易簡單であつて誰れでも妙味が咀嚼できる。(四)事実を描写するのが精密周到である。以上のような指摘は、明治期の文芸評論として主観的な印象批評に墮することなく評論としての一応の体裁は確立し得ている。前述の四点のうち(一)について、『舞姫』の豊太郎を「為永風の人物」「今丹次」に見立て、この作品と江戸人情本とを二重映しにして読んでいる点に特色がある。そして、豊太郎を「眞正の愛情知らぬ男」といい、エリスを「一心他愛なき

女」とみて、二人の性格描写が相違する所に『舞姫』という「好小説」の成立をみたのである。しかし、『舞姫』は謫天情仙が解釈するような単に男女の色恋を描写した人情本なものではないと思われる。なぜなら、主人公太田豊太郎には自己をみつめる内省的な目があり、人情本とは社会的な背景をも異にしているからである。とにかく謫天のこの批評は『舞姫』を読む際の一つのパターンとして留意することができる。この謫天評は、鷗外が「舞姫論争」の際に忍月を圧倒するため「舞姫評中の情語」として援用した点において注目できるが、一般に、臼井吉見（『舞姫』論争）昭29・2）等によって、「批評などとはおよそ縁のない空疎な美文にすぎない」として退けられている。たしかに「しがらみ草紙」に掲載する以上、鷗外へのお世辞や誇張がないとは言いいられないと思うが、謫天評の目敏い点は^四にあると考えられる。即ち、事実の描写が精密周到なのは作者の経験が大いに反映したものと見て、鷗外のドイツ留学の諸体験や帰朝後の医学及び演劇の批評活動と結びつけて『舞姫』を読んでいる点で、ここに早くも創作主体を考慮したよみ方の原型をみることができるといえる。しかし、鷗外を追って来たと言われるエリスと関連つけた読み方はまだされていない。なお、謫天の人情本的な『舞姫』観は、後に笹淵友一（『浪漫主義文学の誕生』昭33・1）によって、別の角度からスポットがあてられることになる。

鷗外の『舞姫』をめぐる、論争がエスカレートするのは、石橋忍月が『舞姫』と題して、明治三年二月三日発行の「國民之友」に

批評文を発表してからである。忍月は「舞姫」において「気取半之丞」という『露子姫』に登場する人物名をペンネームに用い、『舞姫』を批判する側に立ってその欠点を指摘したのである。忍月が『舞姫』の意匠を、恋愛と功名との両立しない人生の境遇として措定して以来、「恋愛」か「功名」かの問題は、『舞姫』論議の一つの課題にもなっている。忍月は、「處女たる事」(Jungfräulichkeit)を重んじる太田がエリスを捨てて帰東する行為は、「人物と境遇と行為との関係支離滅裂」であって、「詩境と人境との區別」がなされていないことを非難し、さらに、主人公の人物説明に前後矛盾があることや、太田の境遇に関する記述の無用性・『舞姫』という表題の不適性などを指摘して、鷗外に質問を迫ったのである。「舞姫」評において忍月は、『舞姫』を「第一の傑作」として認める立場に立った上で、なお且つこの作品がフィクションとして十分でない点をとり上げ、評価の如何を問おうという姿勢をとっている。その文面からは、忍月の当時一級を誇る評論家としての顯示意識をみないわけにはいかないし、その態度には、高慢さが感じられる。忍月の評論は、一見自己の嗜好をもち出したり、無法な注文をつけたり、『舞姫』を認めた上のこととはいえ、根本的な文学作品の受けとり方を誤っているようである。

前述のとおり、『舞姫』の同時代評は、まだ時期として文芸批評の草創期であることから、鑑賞のレベルが低いものであったと思われる。しかし、各々種々の問題を内包しており、後の『舞姫』論の根源となっている点で重要である。さらに、同時代としての特色

は、「舞姫」について作者自身が忍月との論争過程に飛び込み意見を闘わせている点で、いわゆる「舞姫論争」として後に注目を受ける。

二、昭和期（戦前）

大正期には、独立した「舞姫」論はみられない。大正一一年の鷗外逝去の年に「新小説」「三田文学」「明星」「心の花」「演芸画報」等の諸雑誌が、追悼号を出して、その死が鷗外への関心を高めたものと思われる。

「舞姫」の本文に異なることをいち早く指摘したのは、七松庵（神代種亮）である。その著「鷗外舞姫異本考略」（『書物往来』第六号、大14・1）の考察は、簡単なものではあるが、これまでに「舞姫」が収録された諸本（注）を調査して、「舞姫」の異本とその考察とを提示している。鷗外自筆の「舞姫」の原稿についても「下谷吉田書店の珍藏」であることが記され、原稿と初出「國民之友」との対比が行われている。鷗外自筆の舞姫草稿については、ずっと後の昭和三五年二月になり、「上野精一秘蔵」のものとして、長谷川泉の手により複製公開されるに至る。七松庵による異本の考察は、「舞姫」の本文を定着させた岩波版『鷗外全集』（昭11・6）に寄与する所があったと思われる。そして後に浅井清・越智治雄による「舞姫」（『解釈と鑑賞』昭34・8）の本文研究を経て、『森鷗外自筆舞姫草稿』の公開を契機とし、研究が進展して行ったことを感ずる。

昭和一一年六月から同一四年七月にかけて、岩波書店から『鷗外全集』が編纂されることになったのは、一応鷗外に対する研究体制が整ったことを意味する。鷗外全集は、それ以前に、鷗外全集刊行会（大12・1〜昭2・10、普及版昭4・6〜昭6・11）から発行されているが、決定版としてのこの岩波版『鷗外全集』は、それまで未公開であった『独逸日記』が収録されたことや、『舞姫』の本文を定着させた点で、意義をもつものである。この時期において『鷗外全集』が輩出したことは、全集の需要に伴い、鷗外没後十年以上の経過を一つの区切りとして、作品の整備段階に達したことを意味する。ところで、この岩波版『鷗外全集』が刊行されてからの「舞姫」研究は、多角的な問題の広がりをもって展開されるようになる。

佐藤春夫は、「日本文学の伝統を思ふ」（『中央公論』昭12・1）と題して、日本文学の伝統を「もののあはれ」とみなすことで、鷗外の文学はその伝統を受け継いでいない所に「最初の新しい日本人」であることを認め、新日本文学の紀元をここに置いて鷗外の初期創作の重要性を説いたのである。

日夏耿之介は、「雅文小説の価値」（『新女苑』昭13・8）において、鷗外初期の三篇『舞姫』『うたかたの記』『文つかひ』を雅文小説の名をもって呼んだ。「古風な雅文体」の中に「欧文近代スタイ

ルの呼吸」が息つき、一抹の哀調をひくのは若い鷗外の「ロマンティックインズム」が存在するからだとして『舞姫』の文体と傾向とについて論じ、明治文学史は鷗外をもって始まり、鷗外の初期創作はそれを代表するものであると論定した。

伊藤至郎の「若き日の鷗外」(『鷗外論考』昭16・10、光書房)には、鷗外の「独逸日記」を精細に分析して、鋭い洞察がある。明治十九年三月八日の記述から、「日記がその日に於て書かれず翌日或ひは四・五日を経過して後に記された」ことを指摘し、『独逸日記』に書きかえがあったことを暗示している。この暗示は後に、島田謹二「若き鷗外と西洋演劇」(『比較文学研究』昭12・12)によつて、『独逸日記』は漢文『在徳記』の書きかえであるという説を導き出している。

青野季吉の「森鷗外論」(『近代日本文学研究』明治文学作家論)上巻、昭18・3、小学館)は、『舞姫』の写実性をとらえている。エリスの描写の見事さは従来の新文学に現われた女性に比類がないと述べ、『舞姫』には、『武蔵野』や『浮雲』の写実でない「新鮮さ」と「完璧さ」があることを説いている。

『舞姫』を近代的自我の観点から鋭くとらえたのは、矢崎弾の「鷗外の『舞姫』における近代的自覚の性格」(『近代的自我の日本的形成』昭18・7、鎌倉書房)である。鷗外の初期の三篇を「舊世代への抗議と訣別をつげる叫びの文學的表現」として意義づけ、そこには「二葉亭・独歩・花袋などの自然主義者とおもむきを違え、『小説の浪漫性』や『主人公の類別』において「発展的な側面への

着眼」があることを指摘している。その因襲的な概念への反駁が、近代的風雅な文体によつて「貴族趣味で貫かれている」点を説き、主人公が運命の支配を天方伯にゆだねる「無感動的傍観の態度」

・向上のために自我本然の衝動は黙殺出来るという「合理的な人間の誕生」等として人間像の形態を分析し、後年の鷗外の反自然主義的態度の源泉をここに見出す見解を示している。矢崎氏の論考は『舞姫』の近代的自我の性格を自然主義的特質と比較しながらとり上げた所に意義が認められる。『舞姫』に反映している「当時の未成熟な近代的思惟」を、矢崎氏の時代としての戦中の天皇制ファシズム下における近代的矛盾の中からとらえた所に、『舞姫』の新たな問題性が摘発されたものと思われる。この近代的自我の方面からの研究は、戦後になって活発化し、「家」や「官僚機構」に対する批判にまで論が発展して行く。

伊藤佐喜雄は『舞姫』の青春」(『森鷗外』昭19・1、大日本雄弁講談社)において、『舞姫』は鷗外の青春それ自体であり、独逸時代の鷗外と『うた日記』中の「こがね髪ゆらぎし少女」との青春を想定している。『独逸日記』を克明に分析して、鷗外の青春の様相を描き出した点において注目することができる。

鷗外の場合、森家の系族による鷗外関係の資料が、非常に多いことが特色である。

森於菟の「時時の父鷗外」(『中央公論』昭8・112)は、父親の「花園町時代」に関して、「豊太郎のモデルが父では元より無い、『舞姫』の出来事が実在であったか否かは述べたくないがエリス

のような少女の面影が脳裡を離れなかったに違いないと述べている。

典型的な鷗外の伝記として、森潤三郎の『鷗外森林太郎伝』（昭9・7、昭和書房）は、鷗外の多方面にわたる事蹟を伝え、客観的で確証性のある叙述をその態度としている。「文壇活躍時代の上（花園町時代）」の中では、『舞姫』の執筆に関して、「掲載は前後するが、真の処女作は『うたかたの記』で『舞姫』は第二次である」と記述している。『うたかたの記』を鷗外の第一作目とする見解は、以前に与謝野寛が『鷗外全集』第五卷（昭2・8、鷗外全集刊行会）後記の「編集者の辞」に述べていた所であるが、その他に『文づかひ』を第一作とする佐藤春夫の説（注4）があり、互いにその論拠は希薄で、断定することが出来ない。結局、『舞姫』は鷗外の創作面での文壇処女作ではあるが、最初に執筆されたものではないかも知れないという推測に留まる。それよりも、鷗外は『舞姫』を第一公表作に掲げたことで、他の二作よりも『舞姫』にウェイトを掛けていたことが感じられるのである。

小金井喜美子の「次ぎの兄」（注5）「冬柏」七巻一号と九巻一号、昭10・10と13・11」というエッセイ中には、鷗外の帰国後『舞姫』作中のヒロインと同名のドイツ婦人エリスが、鷗外のとを追って来日した時の様子が詳しく記されている。エリスは、留学生仲間鷗外家の裕福なことを聞いて唖かされ、手芸で自活するつもりで日本にやって来たという「人の言葉の真偽を知るだけの常識にも缺けて居る」善人で、鷗外にとっては、「路頭の花」にすぎなかった。

エリス来日事件は、直接的には鷗外の弟篤次郎と喜美子の夫小金井良精とがその処置に当り、鷗外は外聞を憚ってエリスが帰国を決意した後に面会している。喜美子がその時のことを回想して、「エリスはおだやかに帰りました。（中略）誰も誰も大切に思っているお兄い様にさしたる障りもなく済んだのは家内中の喜びでした。」というような語感からは、大切な長男を庇護する森家の雰囲気がよく察せられる。喜美子がこの随想文を著わしたことによって、鷗外の実生活面においてエリスとの交渉があったという事実が明るみに出され、それが作品『舞姫』を結びつけるものとなっている。

エリスの来日事件について語られたものには、同じく小金井喜美子の「森於菟に」〔文学〕昭11・6〕という回想録がある。ここでは、エリスは小柄な美人で『舞姫』中の「この常ならず軽き掌上の舞をもなしえつべき少女」を領させるものがあるが妊娠や流産のことは否定している。『舞姫』を執筆した動機としては、「ちらちら同僚などの噂にのぼるので、ご自分からさっぱりと打明けたお積りでせう。」と述べており、喜美子のこの発言は、後に岸田美子「森鷗外小論」昭22・6、至文堂）等によって『舞姫』の成立を考えるキー・ポイントとなっている。また、年の暮れに『舞姫』の朗読会がもうけられ、親友賀古鶴所が『舞姫』作中の相沢謙吉に造型されていることや、『舞姫』の一篇が鷗外のスキャンダルを解消するであろうことを伝えている。今まで固く秘められていたエリス来日事件が、この時点になって、妹喜美子により公表されたという事は、文学史上私小説全盛の時期を經過して世間の風評と交

涉しない時点で達していたということが察せられるとともに、鵜外再評価の好時期でもあったということが、その執筆を促したものである。このような喜美子の資料をエポック・メイキングとして、戦後の『舞姫』研究は、鵜外の実生活に迫る方向から活発に行われるようになる。

小堀杏奴は、その著『晩年の父』（昭11・2、岩波書店）に「晩年の父」「思い出」「母から聞いた話」の三編のエッセイを収め、愛情深い父親としての鵜外像を浮き彫りにしている。その中の「母から聞いた話」では、鵜外の抒情詩「扣鈕」の中で歌われている「こがね髪ゆらぎし少女」は鵜外と交渉のあったエリス、そして『舞姫』の中に登場するエリスではないかと推察している。また喜美子の証言とは裏腹に、来日したエリスは船から上らない中に追い帰されたことを記している。だから、鵜外の小説『普請中』は「この女に逢ったものとして書いた父の空想の作であろう。」と想定しているのであるが、その文章中には記憶違いや思い過しと目されるところがあり、このような類の文献がどれほど信憑性をもっているかは疑わしい所である。系族による資料は、鵜外の伝記的研究や文学的人間像に迫る場合、貴重な文献となりえるが、反面それが絶対的なものにみなされると研究の動向を誤らせてしまう恐れが生じる。顧慮を要する所である。

戦前の大勢としては、鵜外系族書の公刊によって、鵜外への再発見が行われ、再評価が確定的となった。系族達による刊行物に促されて、鵜外への関心が高まってきたことは、「行動」（創刊号、昭

8・10）「浪漫古典」（第四輯、昭9・7）「文学」（第四卷第六号、昭11・6）「新日本」（第八号、昭13・8）「早稲田文学」（第五卷第九号、昭13・9）などの、相次ぐ「鵜外特集号」の編纂によって、その気運が示されている。また前述のとおり、鵜外全集の刊行によって、『舞姫』研究は内容の分析から、そのロマン性、写実性、自我の覚醒などが指摘され、『獨逸日記』からも追求が行われて、『舞姫』発表当時の初歩的な書評に比べると、その研究的な発展が明らかである。

三、昭和期（戦後）

エリス来日事件が系族の書によって公表されたことを契機にして、岸田美子の「舞姫」（『森鵜外小論』昭22・6、至文堂）は、いちはやくその読みとりを行っている。岸田氏は『舞姫』の執筆動機を、エリス来日事件に喧ましい世間の噂に対する「対症療法」であると推断し、その論拠として、小金井喜美子の「ちらちら同僚などの噂にのぼるので、ご自分からさっぱりと打明けたお積りでせう。」という一文を引いてバックアップにしている。また、鵜外が『舞姫』を執筆していた頃の精神生活を説いて、『舞姫』は破婚の危機を控へつゝ複雑な雰囲気の下に書き上げられたことを想定している。そして、『舞姫』は、来日したエリスの真心に答えられなかった鵜外の「懺悔録」とする見解を提出したのである。岸田氏は、鵜外の系族による資料をもとに、鵜外の実生活面の分析によつ

て作品の意図をさぐり出そうとする『舞姫』研究の新しい観点を確立している。この方面からの研究は、その後おびただしく起り、著しい様相を呈して論議されることになる。

瀬沼茂樹の「日本文学における自我の問題」(『文学』昭23・10)は、『舞姫』を二葉亭四迷の『浮雲』とともに、わが国近代文学史上における「自我の文学」の嚆矢として確定づけた。

二葉亭の『浮雲』は、初めて創作小説を試みる鷗外にとって先駆的な存在である。鷗外は『舞姫』の制作に際して、この『浮雲』を意識したのではないかと思われる。瀬沼氏も指摘しているように、『浮雲』と『舞姫』とはその作風や自我観念に違いはあるが、「主人公に類似の条件」があり、共に当時の知識人を扱い、母一人子一人の家族関係についても共通し、一旦免官解職となつて後恋愛心理が追求されている。その設定において鷗外は『浮雲』に倣つたと思われる節が濃厚である。今日の『舞姫』の種本に関する問題は、専ら比較文学的方面に偏しているが、わが国の『浮雲』との関連性を考えてみる必要があると思われるのでここに問題を提起しておきたい。

唐木順三の『舞姫』『うたかたの記』『即興詩人』(『森鷗外』昭24・4、世界評論社)は、日夏耿之介が提起した鷗外のスツルム・ウント・ドラムクについて、独自の見解を導き出している。唐木氏は、忍月評の「詩境と人境の区別」の問題から、鷗外のスツルム・ウント・ドラムクは、「詩と人、想と実、思想と生活が分裂してをり、疾風怒濤は胸の内に起つて胸の内では消え、生活、人境をもその中にまきこみえなかつたのである。」と述べ、『舞姫』の鷗外は太

田にひとまず自分の詩境を託し、自分は三界乞食の境に落ちることを避けるどころか、健全すぎるほど健全であった。そしてその健全さが『舞姫』の結末を非浪漫的なものにしてゐる。」と言つて『舞姫』の浪漫性を否定したのである。

平野謙の「芸術と実生活」(『人間』昭24・5/6)は、芸術と実生活の相関関係を問題とする中で、『半日』を鷗外の第二の処女作とみなし、『舞姫』成立のためにはエリス来朝にひきつづく最初の結婚生活が必要であつたように、『妄想』成立のためにも『半日』に描かれたような第二の結婚生活の十年間が必要ではなかつたか。『妄想』のなかの有名なレジゲナチオンという要約の出発点として『半日』に表現された鷗外独特の耐える勁さはなくてはかなわぬものだった。」と言つて、『舞姫』『半日』『妄想』を一系列の作品とみなし、『舞姫』にその源流を求めて、これらを「自家用小説」の名で呼んだ。

岡崎義恵の「處女作三部における愛」(『日本芸術思潮』第三巻の上「鷗外と詩念」昭24・8、岩波書店)では、鷗外の芸術と生活とを貫く重大な問題を「愛」の中に見出し、「愛を失つた爲の悔恨を十分に反省し、この人知れぬ悔恨をひそかに孤り書き綴ることにより、幾分でもその苦しみを晴さうとするあきらめの情が靜かに全篇を涵してゐるやうである。(中略)愛、ただでなく、愛を喪失した悔恨があり、悔恨だけでなく、その悔恨の原因や成立を反省する知性がある、この知性から来る運命諦観的な静かさが、この作の究極の内容である。」と述べて、『舞姫』解釈に「詩念」の観点を

もちこんだ。なお、同書中の「鷗外と諦念」は、鷗外作品の文学史的な研究上大きな業績となっている。夏目漱石に対して「則天去私」の問題が追求されているように、鷗外に対しては「諦念」の観点から全体のまとめが行われている。

佐藤春夫の「森鷗外のロマンティズム―近代日本文学の展望のうち―」（『群像』昭24・9）は、近代日本文学の紀元を鷗外のドイツ留学に求め、三部作中では、『うたかたの記』を最も推賞している。そして、『舞姫』は「封建人が近代人となる精神変革史」を描いた「テーマ小説」とする典型的な見解を提出した。研究史上、この見方はかなり強力なものとして意義づけることができる。さらに、佐藤氏は『舞姫』に、中国の伝奇小説風のものが増していることをいち早く指摘し、『舞姫』は「東洋の伝奇に泰西のロマンティズムの接木を企てた」ものであると洞察した。『舞姫』を「中国伝奇小説」風のものとする考え方は、後に笹淵友一によって発展的に解釈される所となる。

『舞姫』を近代的自我の確立としてみる見方にアンチ・テーゼをなしているのは、大石修平の『舞姫論』（『文学』昭26・4）である。大石氏は、『舞姫』における「人間的めざめ」は、「官僚の意識」であり、『舞姫』の出現は、「あたらしい官僚文学の成立」であるとして、この作品が「官僚性への反抗」をあつかったものとみなしている。そして、『舞姫』は「絶対主義の開明的性格の及びその偽まん性の反映」であると述べ、みずみずしい魅力を持っていると見られるのは「鷗外の有能」さのためであるとして、作品の近代性

を否定した。『舞姫』解釈に「官僚性への反抗」という見解がもち出されるようになったのは、時代的に、昭和二年日本国憲法が發布され「言論の自由」が可能となったことによるところと思われる。

又、窪川鶴次郎は、社会背景的なこの官僚性の問題を特に重視して、『近代文学の貧苦』（『世界』昭26・5）を著わしている。この論考は、『浮雲』の文三と『舞姫』の豊太郎とを比較しつつ、その貧苦の問題を作品に結びつけてみて行った所に特色がある。窪川氏は、太田豊太郎の「新たな自覚」を「封建的な家族制度と官僚制との本質にたいする近代的自覚」ととらえている。たしかに豊太郎の意識には「家族制度」や「官僚制」がおぼろげに上っていたであろうと思われるが、しかしその本質をはっきり見極めていたであろうか。豊太郎はまだ「奥深く潜みたりしまことの我」が、「やうやく表にあらはれ」出した所であって、窪川氏の言うような「封建的家族制度」や「官僚制」に対してその何たるかという本質を明確にはとらえていなかったと思われる。さらに窪川氏は、豊太郎の「新たな自覚が、牢固たる家族制度をも官僚制と共に、人間を『所動的、機械的』にしてしまうものとして常に統一にとらえていること、そしてこの轉換が明白な思想的形式をとって行われている」とやや難解な文章で述べているが、「家族制」と「官僚制」とは豊太郎の思想中で同じ比重を占めていたであろうか。豊太郎が、「きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり」と言って内的自我を発見してから、「我母は余を活きたる辭書となさんとし、我官長は余を活きたる法律となさんとやしけん。辭書たらむは猶ほ堪ふべけれ

ど、法律たらんは忍ぶべからず。」と言つて、母の意志である辞書となることには堪えることができるが、官長の意志である法律となることには忍びないと言っているのであるから、ここで明らかに「家族制」と「官僚性」との比重が分れている。即ち、窪川氏のいう豊太郎の「新たな自覚」は、「官僚制」のみに対するものであり、「家族制度」と共にした「自覚」とみるのは正確ではないと言える。「舞姫」の物語は、豊太郎の「自覚」が促された段階で、エリスとの遭遇と訣別とを描いて行くが、窪川氏は、豊太郎の「免官」がこの作品のテーマに重大な意義をもっていると定め、エリスを裏切るに至るまでを分析し、豊太郎の思想面を掘り下げて、氏の深い読み取りが感じられる。豊太郎がエリスとの情縁を断つ約束を、相沢謙吉が大臣に告げたらしいことを知って、豊太郎は「あなあはれ、天方伯の手中に在り。」と嘆息するが、窪川氏はここに「先驅的な『舞姫』における近代的苦惱の本質」があるとみて、「動搖の一つ一つがすべて性格から説明され、その間の苦惱が苦惱として追求されない。そして苦惱に對して詠嘆により自身を第三者化している。(中略)そして現實の官僚制支配權力に、つまりその裏返されたものにすぎない封建的な理屈ぬきの温情・人情に屈服する。」と述べ、このことは、「實に近代日本の文學と知識階級における、思想と批判精神の非政治的・非社會的傳統への端緒をなしているのである。」と結論したのである。窪川氏のこの論考には、『舞姫』の官僚制や家族制について釈然とさせるものがあるが、しかしその解釈のし方は、『言論彈圧』が解禁されて官僚批判が出来るようになる

った窪川氏の時代としての時代的解釈が強すぎるように思われる。「舞姫」は、官僚主義などの色をはっきりと出したものではないだろう。なぜなら『舞姫』の本文が非常に気品高く醸し出されていることをみれば、そこに思想的な作者の意図など表わせないと思うからである。文体と思想とは骨がらみの問題としてとりあつかうべきだと思ふ。その意味で『舞姫』に官僚制を強くおし出すことには賛成できない。なお窪川氏のこの論考は、次の「転向文學論」(『近代日本文学』昭27・5、河出書房)に発展し、『舞姫』が一種の「転向文學」としてみられるようになる。

勝本清一郎の『舞姫』と『普請中』—私の文學的一演習—(『文庫』第一号、昭26・10)は、小堀杏奴の「小説『普請中』はこの女(エリス—筆者注)に逢つたものとして書いた父の空想の作である」という説に對して明らかに間違ひを指摘している。即ち、『舞姫』と『普請中』は、素材的に全く別の作品であることを説いたのである。その論拠として、『舞姫』のエリスが金髪で青目であるのに対し、『普請中』の女はブリュネットで褐色の目であることとを指摘し、このような決定的な違いを鵜外は身をもって体験したはずであると断定した。そして、鵜外が『普請中』に記述した「ゲルトネルプラッツの芝居がはねて」という箇所を、次号の「三田文學」において、『チェントラルテアアテル』の記憶の誤であった」と訂正していることから、鵜外の客觀的事実を尊重する態度は、『普請中』の舞台がドレスデンであることを示すものであると確証している。これは、ベルリンを背景にした『舞姫』と明らかに

素材を異にしている。勝本氏のこの論考は、「文庫本と全集本だけでもちょっとした文学的演習」ができるという好例を示し、文献至上の研究方法に反省を促している。

平野謙の『舞姫』(鷗外)論^(註7)〔近代文学〕昭27・12)は、『舞姫』の成立に関して鷗外の私生活に迫る方向から極めて穿鑿的な眼を向けている。氏は、『舞姫』の公表が妻登志子に対する一種の挑発ではないか、いや、登志子への挑発というかたちを通じて母峰子に対する無言の反抗を企てたのではないかと疑って、『舞姫』のモチーフのなかに、本来の芸術的モチーフのほか現実的モチーフが並存しているという二元的相剋の課題を提出した。しかし、即座にこの自説を「下司なかんぐり」として撤回し、「それこそあまりに私小説的な批評方法のもたらした通俗的な貶しめというべきだった。」と言って自重し、岸田美子の「デマゴギイを封ずる対症療法」の見解に対しても同様に省察が加えられた。ここで平野氏が投げかけている問題は、一作品がどこまで独立した生命を保ち得るかということがある。ひいては、作家の家庭内での私事をどれほど投映させて読むべきかという問題に関わってくると言えらる。

藤井公明の「独逸日記と鷗外意中の人」(「香川大学文学部 研究報告」第一部第三号、昭28・2)は、鷗外の『独逸日記』がかぶっているヴェールをすかして鷗外の諸作品を考える必要を説いている。藤井氏は、『独逸日記』が「自由日記」であることから、鷗外の独逸留学四年間における感情の起伏を、グラフに山と谷とをもって表わし、「山の中に、文づかい以下の小説の素材が多く含まれて

いる点」を解明して、そこに現われる女性を精細に調べ出し、ドイツに於ける鷗外意中の人を「ルチウス嬢」であると推定した。そして、この「黒き衣を着て、面に憂を帯びたる人、ルチウス嬢」の幻影が、『舞姫』ほか、うたかたの記・文づかひ・ぼたんの詩などを書く時に、若き鷗外の脳裏をかすめたにちがいないと説いたのである。日記は、人の行動を調べる最も確実な媒材である。それを通じて人の心理の陰翳を読み取り、鷗外意中の人をルチウスと定めた所は藤井氏の創見であったと思う。しかし、『独逸日記』の場合そのかぶっているヴェールをすかして見ることにどれほど『舞姫』の片鱗が見出せるかは疑問である。なぜなら、『独逸日記』が漢文『在徳記』の書きかえであった場合、その原形とどれだけギャップが生じるかに問題が残されているからである。

白井吉見は、『舞姫』論争—近代文学論争(二)—〔文学界〕昭29・2)と題して、初期の批評、忍月の「舞姫」や鷗外の「氣取半之丞に与ふる書」、謫天情仙の「舞姫」を読み「等を積極的にとり上げて評価を与えている。内容は、命題の『舞姫』論争とというような独立の論考ではなく、『舞姫』論的なものであり、『独逸日記』やエリス問題などに転換されて、その論旨は分散している。白井氏は、謫天評をとりあげた中で、鷗外が謫天情仙に同意して、「太田は眞の愛を知らず。然れども猶眞に愛すべき人に逢はむ日には眞に之を愛すべき人物なり。」と言ったのは、あまりにも見えすいた遁辞であり、太田にとってエリスは眞に愛すべき人ではなかったのかと疑問を發している。ここには、白井氏の自己矛盾的

な見解が現われている。氏は、鷗外の論争中の発言をそのまま活用して、『舞姫』の解釈に当たっているようで、前述のような意見は、『鷗外が謫天情仙に同意』して言ったものだという独自の解釈を前提にしているため、自らその矛盾を作ってしまう「遁辞」だと言わざるをえなくなつたものと思われる。鷗外の「気取半之丞に与ふる書」を『舞姫』の自作自解とみた所から、氏の矛盾が生じたものと思われる。

猪野謙二の「日本の近代化と文学」(『岩波講座文学』四卷「国民の文学」近代篇(一)、昭29・1)では、『舞姫』の近代的自我の覚醒と挫折の問題について、太田における自我のめざめは、封建的な「家」の繋縛からの完全な自由を前提とし、ベルリンにおいてはじめて果され得たもので、個人主義的な自覚とそれにもとづくエリスとの恋愛生活が、故国日本からの長官の来遊を迎え、栄達への機会を目前にするとあえなく蹂躪されて行く、と言って、『舞姫』の設定条件を考慮して、掘り下げていった所にみるべきものがある。

中野重治は、『舞姫・うたかたの記他二篇』解説(『角川文庫』昭29・6)において、忍月評の「功名を捨てて恋愛を取るべき」ということが『舞姫』の価値を低くするものではないと言って、『舞姫』の豊太郎は恋愛か功名かという二者択一で単純に一方を取つたのではなく、「二者の統一がどこかで望まれている点の文学へのはじめての表現」であることを説いている。そして、『舞姫』の「作の構成ということも含めてのスタイル・文体の高さと新しさ」を指摘した。

桑島昌一は、『鷗外と『舞姫』について』(『岩手教育』第三〇巻一二号、昭30・12、岩手県教育調査研究所)という論考において、『舞姫』作品中の年立について考察している。作中より豊太郎の年齢と年代を算出し、豊太郎の留学を「明治十七年(二三歳)」、帰朝を「明治二十年(二八歳)」と推断して、その年立が実際の鷗外と同一であることを示している。この『舞姫』の年立考に関しては、後に関良一や長谷川泉が異論を唱える所であるが、桑島氏の視点が鷗外その人と作中人物豊太郎との距離に注がれたところに、新解釈があったと言えるだろう。なお、桑島氏は同書中で、豊太郎のエリスに対する非人間的な態度を批判的にとらえ、『舞姫』の結語「嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むこゝろ今日まで残りけり。」を豊太郎の責任回避とみて重要視し、そこに鷗外的な巧みな処理方法を見出している点に創見がある。

小田切秀雄の、『森鷗外『舞姫』三部作と『於母影』』(『講座日本近代文学史』1「日本近代文学の成立」明治上、昭31・10、大月書店)は、『舞姫』の中に「秩序の強圧によって心ならずも屈服し転向する知識人の先駆的なタイプ」をみて、「日本において」という限定つきで、『舞姫』を転向文学と評した。

谷沢永一の『鷗外『舞姫』の発想』(『国文学』関西大学国文学会第一八号、昭32・7)は、従来の『舞姫』観とは違う次元からその発想を問題としている。谷沢氏は、鷗外の手法が、太田を描く場合とエリスを描く場合とは著しく相違していることから、太田に対

しては「事実そのものの持つリアリティのまま読者につきつけ」「作者の評価を決して附与しない」ことが鵬外の究極的に狙った表現方法だとした。氏はここで、『舞姫』の描写が「簡潔」で、豊太郎の内省を描くのはこの「圧縮された簡潔さ」をおしていることを指摘したのであるが、『舞姫』の文体ということ考えた場合、口語体の時と比較して、文語体であることは、細かな心理描写をすることを要しないという特徴をもっている。その文語体の特徴を鵬外は活用したものであると思われるし、漠然とした文体であるだけに我々は『舞姫』の真意を読みとることに難渋しているものと思われる。谷沢氏の指摘した描写方法ということだけではなく、文体についても考慮できるのではないかと思われる。『舞姫』の作品中、太田が免官になりエリスとの生活における描写は、「我学問は荒みぬ」という一文をもってその心情が語られている。この唱い出しは、一見豊太郎の嘆息のようにも聞えるが、続くジャーナリストとしての意識を述べた文が誇らしく力強く語られているため、嘆息としては効果をもたない。それではなぜ「我学問は荒みぬ」を筆頭に書きねばならないのか？ 谷沢氏はこの疑問に明解な答えを提出して、「異なる価値体系へ同時に誘引される青年心理の一例として、構成」されたものとするユニークな「舞姫」観を打ち立てている。氏のこの論考は、太田の形象を発想せしめた鵬外の思念の中に「問題そのものがいかに根深いかを実感」し、その実感の強さが「なにもかにかりたてられるような煮燥」を招き、このような性質の反発から「舞姫」が発想されたことを突いて、非常に卓見を示して

いる。谷沢氏が指摘した鵬外の「喧嘩を買ってゆく態度」は、そのまま忍月との「舞姫論争」においても顕著にみられる。

松原純一は、『鵬外現代小説の側面』（明治大正文学研究）第二二号、昭32・7）において、鵬外の現代小説における人名のつけ方に一定の法則があることを説き、『舞姫』のエリスは鵬外を追って来たドイツ女性エリス、親友相沢謙吉は賀古鶴所、天方伯は山泉伯、豊太郎は森林太郎という関連性を導き出している。

河村敬吉は、『若き鵬外の悩み』（若き鵬外の悩み）昭和32・6、現代社刊）で、若き鵬外には、表面的に全てに恵まれていることから来る将来の制約があり、『鵬外』の行き方が、わくの中から一歩も出られなくなるという一種の悩み、悲劇が生れていた。」と述べて、同じ医学者として鵬外の青春の悩みをとり上げている。

長谷川泉の『舞姫』（『国文学解釈と鑑賞』昭32・8・9、11・12、33・1・3刊）は、様々な角度から今までの『舞姫』論を再検討し、総括したものである。その中で、エリス問題を重点とし、森家の系族の資料に基づいて、エリス事件の追求に精力を傾けている。以前平野謙氏が撤回した説を受け継いで派生した論の展開がみられる。

島田謹二の『若き鵬外と西洋演劇』（『比較文学研究』6第四卷第一二号、昭32・12）は、鵬外が在独中に示した西洋演劇への関心とその実証的な研究を行っている。その中で、『独逸日記』の原形『在徳記』は、漢文で書かれていたのではないかという推察がある。ドイツ関係の日記（『航西日記』『隊務日記』『遼東日乗』）が全

て漢文で書かれていることからの推論であるが、その指摘は当を得ていると思われる。さらに島田氏は、鷗外の母峰子宛の書簡に基づいて、鷗外がそれを小倉時代に「手を入れたらう」こと、「さしつかえある部分（中略）主として、女性関係、情事関係」を削り、「逆に相当のアポロギヤを消極的にもりあげたところもある」ことなどを説き、「現行の『独逸日記』が、ドイツ時代の鷗外の動静を全部は語っていない」と判断した。氏の卓見を示すものである。『在徳記』が発見されない今日、『独逸日記』の中から鷗外の青春のかたみを追尋することは再考すべき問題として、島田説はその示唆を与えるものである。

佐藤春夫の指摘のあとを受けて、中国伝奇小説の影響を重視し、掘り下げて行ったのは、笹淵友一の「森鷗外―自我の覚醒とエキゾティシズム」（『浪漫主義文学の誕生』昭33・1、明治書院）である。この論考において笹淵氏は、まず鷗外の浪漫主義ということについて、明治二〇年代の鷗外の文学活動を「浪漫主義」とみなす一般通念に対し、鷗外のそれは時代的なものが反映した必然的な青春の現象に他ならないとして、むしろ「古典主義」的な傾向を見出してゐる所に特色がある。なお、佐藤氏の中国伝奇小説の感化ということに関して、鷗外が「真正の恋情悟入せぬ豊太郎」という情仙の評語を「舞姫評中の情語」と認めたことを示していると言つて、『舞姫』の人情本的な性格を打ち立てたのである。そして、従来の近代的恋愛観を前提とした自我挫折論を否定して、「このよう

な誤解を惹起した原因は、主として非近代的、好色的女性観・恋愛観を内包してゐる中国小説や人情本の世界に近代的恋愛や自我解放を主題とした西欧文学の世界が接木され、二重映しにされた点にあった」と論じ、それまでの『舞姫』の近代小説としての見方に反対した。笹淵氏のこの論考は、鷗外の「気取半之丞に与ふる書」中の発言を手掛りとして新しい見解を提出したが「気取半之丞に与ふる書」の意味する性格的な検討がなされなかつたため、この説には問題が残る。

生松敬三の「森鷗外―近代日本の思想家―」（昭33・9、東京大学出版会）中にみられる「戦鬪的啓蒙」の章では、鷗外の青年期の啓蒙運動の戦鬪的態勢を、単に文壇的分野だけにかぎらず医学界における活躍にも言及して注目すべきものである。鷗外の『帰朝の第一声』や『智慧袋』中の「つまさだめ」には、「婦朝時の鷗外の鬱屈、また婦朝直後の結婚において更に増し加えられてきた抑圧」がみられ、それが鷗外の戦鬪的な啓蒙活動の発源となつたことを説いている。生松氏の言う「戦鬪的啓蒙」の時期に、鷗外は『舞姫』を描き、「舞姫論争」を展開したのであるから、谷沢氏の「鷗外『舞姫』の発想」説と一脈通じている。

柳田泉・勝本清一郎・加藤周一・猪野謙二らによる座談会、「鷗外を中心に」（『文学』昭33・10）は、参加者の意見の交流がもたらされた異色の論考である。「ロマン主義と古典」の話題に移つて勝本氏は、豊太郎の散歩のコースが地理的に不自然だということにふれて、「ティーア・ガルテンから太田豊太郎が大学病院に近いモン

ビジュウ街の下宿に帰るのにアルト・ベルリンのクロスター小路を通つてはじめてエリスに逢うという構想は、上野から神田の下宿へ帰るのに築地で人に逢つたみたいに方角違いだ」と表現している。ドイツの地理を心得ているはずの鷗外としては、あえてこの不自然さをおかしたものと思われ、ここから『舞姫』のフィクション性が感じられるというものである。

昭和三四年三月発行の筑摩書房版「森鷗外全集」第一巻に収められた『舞姫』には、須藤松雄の手により「語注」が付されている。広い読者層に便宜を与えらるゝとにも、『舞姫』の本文解釈が客観的になつたことを意味する。

浅井清・越智治雄共著の「鷗外と明治―舞姫―」(国文学解釈と鑑賞)昭34・8)は、まず、『舞姫』の動機について、鷗外の青春を縛束した軍隊の機構を怨詛することにより、その青春を悔恨して書かれたものだと見ている。この論考の主眼は、諸本の『舞姫』本文にかなりの相違があることから、初出文と全集文との異同調査を行った所にある。そこで、『舞姫』の改訂は雅文化の方向に一層進められて、作者が「語りただけのことを語るため」にこの文語体(雅文体)が効果的であると言っているのは、裏返せば、文語体では語りただけが語れると言うのであろうか。文語体は、口語体に比べて、細かな心理描写などを必要とせず、圧縮されているのが特徴と思われる。なのにその文語体が「語りただけのことを語る」のに効果的と言うのは要を得ない。その上『舞姫』の豊太郎に対しては、作者は何も語っていないと思える。末尾の一文にしろ、作者

の評価がなされていないから含蓄をもって問題が残るのである。なお両氏はこの文語体を「豊太郎を動かす作者の手つきには(略)ある種の作為が感じとられる」と言つて「作者の実生活上の事件」を配慮して生れたと述べているが、これは文章上のことを言うのであつて、文体論ではないと思われる。従つて、鷗外の雅文体が、「実生活上の事件に対する配慮から生まれ」それが作者の「語りただけのことを語」つているというのは論理が整然としないのである。ともあれ、両氏のこの論考は『舞姫』本文異同の調査と考察とを行つた点において画期的なものである。

渡川驍は「鷗外の私小説」森鷗外作品論(二)「文学者」昭34・8)において、エリス問題について鷗外が山県有朋を利用したことを説いている。『舞姫』作品中に山県有朋であることを明らかに想像させる天方伯を登場させたことは、「エリス問題は、すでに陸軍の大御所山県の耳に入り、その人の意見によつて、すでに無事解決した問題であることを、人々に知らしめることではなかつたか。」と想定した。そして『舞姫』の発表が、妻登志子との意に染まない結婚を破壊し、それが母へのそれとない抗議となることから、ここに鷗外の両面作戦をみたのである。渡川氏の論考は、小金井喜美子の資料に基づいて展開されたもので、以前の平野謙氏の暗示と長谷川説を受け継ぎ、また松原純一のモデル研究から論を得て発展している。一貫した『舞姫』の私小説的解釈として、研究史的位を獲得している。

平野謙は、「社会的適応と不適応―文学者と文学作品を素材とし

て」(『近代日本思想史講座』6、昭35・2、筑摩書房)において、以前否定し去った論について再度検討している。平野氏はここで、石橋忍月がかつて「恋愛か功名か」の問題を發した点に「近代文学の初頭を飾る『自我と環境』という好個のテーマ」があると認め、反響淵説の立場をとって、太田の近代的自我覚醒の内実を分析し、太田のそれは「いつも土壇場を回避することによって辛うじて作者によって温存されているにすぎない。」と述べ、佐藤春夫の「封建人が近代人となる精神変革史」説を評価したが、それにも歴史の限界というべきものがあることを「烟眼に洞察したところ」に鷗外のモチーフとテーマがあると論じた。

以上が、この期の大勢である。戦後における『舞姫』研究の課題は、「近代的自我」確立への要請であり、その抵抗物として「家」及び「官僚機構」の問題がクローズアップされた。瀬沼茂樹、佐藤春夫が、『舞姫』を「自我の文学」として打ち立てて以後、この問題は『舞姫』論の一つの焦点となっている。一方、エリス来日事件の公表に端を發して、『舞姫』はあたかも鷗外の私小説のように読まれる傾向が著しくなった。これより『舞姫』の研究は屈折した方向に進んでしまい、鷗外が実際にこの作品を書いた芸術的な意図というものは見失われているようである。その中でも、谷沢栄一のような作品を深究した新しい観点は、従来の『舞姫』論の中でも出色のものである。このようにして、『舞姫』は、作品論を中心にその執筆動機や発想・モデル問題・主題・校異などの多方面から掘り下げ

られ、その研究の細微にわたる発展をみる事ができる。戦後の学界の進歩を示すものである。

『舞姫』の研究史は、昭和三五年までを追求することができた。何分『舞姫』に関する文献は枚挙に遑のない状態であり、その内容もかなりの広がりをもっているので、全てを網羅し尽すことはできない。従って、当然のことではあるが研究史上何らかの意義をもつものに限定し、且つ問題の出発点を明らかにするため研究史の上で重点的な考察から始めている。なお、続稿は、「大阪樟蔭女子大学論集」第15号に発表の予定である。

註

- 1 七松庵の調査による『舞姫』の異本は、自筆の『舞姫』稿本・「国民之友」の他、「国民小説」第一(明23・10、民友社)・「美奈和集」初版本(明25・7、春陽堂)・「水沫集」訂正再版本(明39・5)・イーストレーキ訳、エドキン・アールド校閲の英訳(明治40・2、彩雲閣発行)・「塵泥」(大4・12、千章館)・「水沫集」縮刷本(大5・8)等である。
- 2 『舞姫』の本文を定着させた岩波版『鷗外全集』著作篇第二巻の後記には、佐藤春夫によって、「原拠として『塵泥』を採り『国民之友』『国民小説』『水沫集』各版を参照せり。」と記述

されている。

3 この文章は、昭和十七年四月刊の改訂版『鷗外森林太郎』において、「掲載は前後するが、『うたかたの記』の方が前に書かれたと聞いている。」と改められている。

4 佐藤春夫は『近代日本文学の展望』（昭25・7、大日本雄弁会講談社）に、「初期の三短篇のうち書かれたのは最も早かったと聞が何故か反って最後に発表された『文づかひ』は……」と記している。

5 『森鷗外の系族』（昭18・2、大岡山書店）に収録されたものに拠った。

6 新潮文庫版『芸術と実生活』（昭39・4）に「森鷗外Ⅰ」として収録されたものに拠った。

7 注5と同じに収録され、「森鷗外Ⅱ」と改題されたものによつた。

（本学副手・昭和五十一年三月卒）

編集部注

本稿は、二百枚余にわたる卒業論文をもとに、大幅に加筆訂正してもらったものである。枚数に制限があるため、引用文などが必要にもかかわらず省略されている場合もある。